

2025年8月17日 第二礼拝

説教題「喜びにあふれて」使徒言行録8章1～8、26～40節

主任牧師 加藤 誠

「宦官はもはやフィリポの姿を見なかったが、喜びにあふれて旅を続けた。」(使徒言行録 8:39)

ステファノが殉教した日、エルサレムの教会に対し大迫害が起こりました。ただこの大迫害を通してキリストの福音がイスラエルの国境を超えて世界中に広がっていくのですから不思議です。福音の小さな種がたんぼぼの綿毛のように聖霊の風に持ち運ばれて届けられていく。その不思議な出来事の始まりが使徒8章に記されています。

この8章から学ばされることが三つあります。一つ目は「聖霊は危機や困難を通してこそ働く」ということです。主イエスは使徒言行録の最初で「あなたがたの上に聖霊が降ると…ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる」と語られましたが、その約束の言葉と重ね合わせるなら、厳しい大迫害の中に聖霊の力が働いたということです。後に使徒パウロはその手紙の中で、彼らが牢獄につながれることが福音の前進につながっている事実をぜひ知ってほしいと語っています。激しい反対、浴びせられる罵声、背中に振り下ろされる鞭。私など想像しただけで心折れてしまいそうな状況の中で、主イエスの福音はむしろ前進する。福音には真実の力があるから。これが初代教会の告白です。私たちにはマイナスに思える危機や苦難を通して聖霊は力強く働く。このことをまず覚えたいのです。

二つ目に「聖霊はちょっと変わった／困った人たちを通して豊かに働く」ということです。初代教会には二つのグループがありました。ヘブライ語を話すユダヤ人とギリシャ語を話すユダヤ人です。前者はユダヤで生まれ育った人びとで十二弟子が中心。後者は外国で異邦人と一緒に暮らしてきた人たち。ステファノやフィリポがその中心。彼らはエルサレム神殿や律法に対する姿勢において考え方が異なっていました。例えばステファノは「イエスによって神殿と律法はその役割を終えた。イエスを通して世界中の人々が神の救いに招かれている」と語りました。これはイスラエル民族だけの信仰という枠を大きく超えた福音理解でした。それに対して、ペトロたちはユダヤから出たことがなく、神殿と律法を大切にすることが当たり前でできたから、彼ら穏健な正統派から見るとステファノやフィリポたちは「ちょっと変わった／困った人たち」でした。しかしそのフィリポたちを通して、サマリアやエチオピアの宦官という、ペトロたちが自分たちからは積極的に関わりを持とうとしなかった人びとに福音が届けられていきます。穏健な正統派の良い点もありますが、それまでの殻を破って新しいものが生み出されるためには「少し変わった／困った人たち」の存在が必要なのです。この時、聖霊は「少し変わった／困った人たち」を用いて豊かに働いたのでした。

そして三つ目に「福音は喜びを通して人から人に伝えられていく」ということです。8章で起こっていること、それは喜びの伝播です。フィリポを通してサマリアの町の人びとは大変喜び、エチオピアの宦官も大いなる喜びに生かされていきます。「見えるもの」に目を注ぐならフィリポは迫害によって多くのものを失ったはずですが、しかしフィリポは主イエスからいただく喜びに押し出されていきます。福音はそれを伝える人が喜びに生きていなければ伝わりません。その意味で私たちは主イエスからいただく喜びをどこまで自分の言葉と行動にあらわしているのでしょうか。私たち自身が福音の喜びの「通りよき管」とさせていただきたいのです。「管」の役割は詰まらせてはいけません。主イエスの喜びをわたしのところで止めてはいけません。

さて、フィリポは主の天使に導かれて「寂しい道」に出かけていきます。「エルサレムからガザに下る道」。今やその道は「暴虐と悲しみにあふれた道」になってしまっていますが。どうもフィリポはサマリアだったり「寂しい道」だったり、人があまり行かないような場所に背中を押されていきます。そこでフィリポは馬車に乗ってエルサレムからエチオピアに帰る途中の宦官と出会います。宦官は馬車の中でイザヤ書を朗読していました。彼が読んでいたのはイザヤ 53 章「苦難の僕」、イスラエルを罪から救うために「苦難と殉教の死を引き受けた僕」としてよく知られている箇所です。女王の宦官は、宮殿の中で最高の権力と富を持つ人物です。その彼がどうして「苦難の僕」のことをもっと知りたいと心惹かれたのでしょうか。

浅田次郎の『蒼穹の昴』という、古代中国の女王に仕えた宦官の生涯を描いた小説があります。主人公の宦官は極貧の中に生まれ、多くのライバルを蹴落として最高の権力にたどり着くのですが、最後の最後で「自分が生きてきた人生に何の意味があるのか」と、心にあふれる哀しみと虚しさを抱えて天を仰ぐ場面が印象的でした。想像するに、エチオピアの宦官は、「苦難の僕」が黙って人々の罪を引き受けていく姿に、自分ではどうしようもできない彼自身の罪の救済を感じたのではないかと思うのです。私たちは自分の生きる意味を何とか生み出したいと力を尽くしますが、最後に私たちに生きる意味を与えてくださるのは神ご自身しかおられません。エチオピアの宦官は「苦難の僕」が黙って人々のあざけりを受けていく姿に、私たち人間の根源的な罪を引き受けてくださる神を見たのではないか。そしてフィリポから、この「苦難の僕」こそ十字架のイエスであると知らされた時、「ここに水があります。バプテスマを受けるのに、何の妨げがあるのでしょうか」との告白に導かれます。わたしの根源的な罪を引き受けて、わたしが生きる命に意味を与えてくださる方。この方の贖いと赦しに生かされていく。その喜びにまさるものはありません。そのとき宦官の「寂しい道」は「喜びにあふれて旅を続ける道」に変えられていったのです。私たちも、この十字架の主からいただく命の喜びを大切に受けて、また分かち合っていきたいのです。